第38回読売書法展
役員作品鑑賞ガイド

ごあいさつ

読売書法展は伝統と古典に基づいた書の継承と発展をめざして昭和五十九年（一九八四年）に始まりました。出品約一万四千点、東京展、関西展、九州展の三会場からのスタートでしたが、今回の第三十八回展には、約二万点の力作が集まり、全国八会場（東京、関西、中国、北海道、四国、東北、中部、九州各展）を巡回します。

読売書法会の発足以降、書壇を取り巻く環境は大きく変わりましたが、「本格の輝き」を標榜する読売書法展は方向性を見失わず、着実に歩みを進め、国内最大規模の公募展に成長しました。

また、今回からは書道文化の裾野を広げるため、公募の出品資格を満十五歳以上に引き下げ、高校生を中心に若い世代の作品が多く寄せられました。

読売書法会の役員書家は、古典を考証しながら新たな可能性を追求し、常に自己研鑽に励みます。いまなお止むところを知らない役員書家の旺盛な創作活動は、書法会の根幹を支えるだけでなく、現代書道芸術の発展に多大な影響を与え続けています。

国内書壇の最高峰を形成する最高顧問、顧問、常任総務の作品ガイドを作成しました。作者自身による制作意図を紹介しておりますので、ご鑑賞の際の手引きとしてご活用いただければ幸いです。

令和四年八月

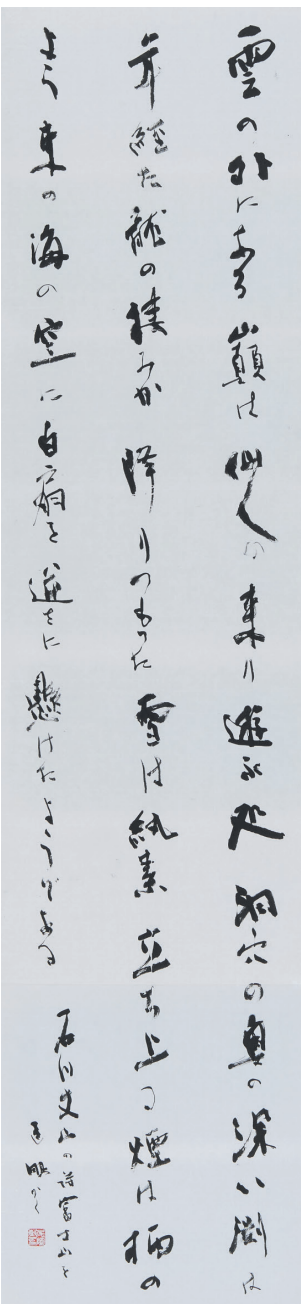
読売新聞社
読売書法会

© 2022 読売新聞社　読売書法会

最高顧問　尾崎　邑鵬

右：羈旅情（常建『泊舟盱眙』）
左：富士山（石川丈山）

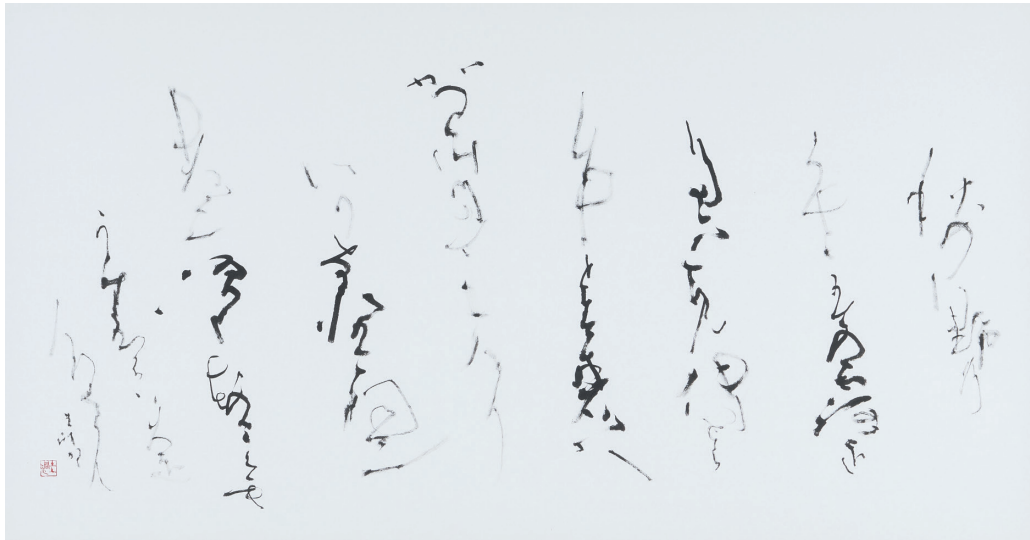
毎回楷書を六朝風に書いているので、行書体も、と思って、始めの頃に黄山谷をと思ってやりかけましたが、終わる処は六朝風になりました。筆は剛毛です。



調和体は鈴木翠軒先生のかながいいと思っているので、今回のもそのねらいです。少し単調になり過ぎますが、私は調和体はこれくらいでよいという説を信じています。

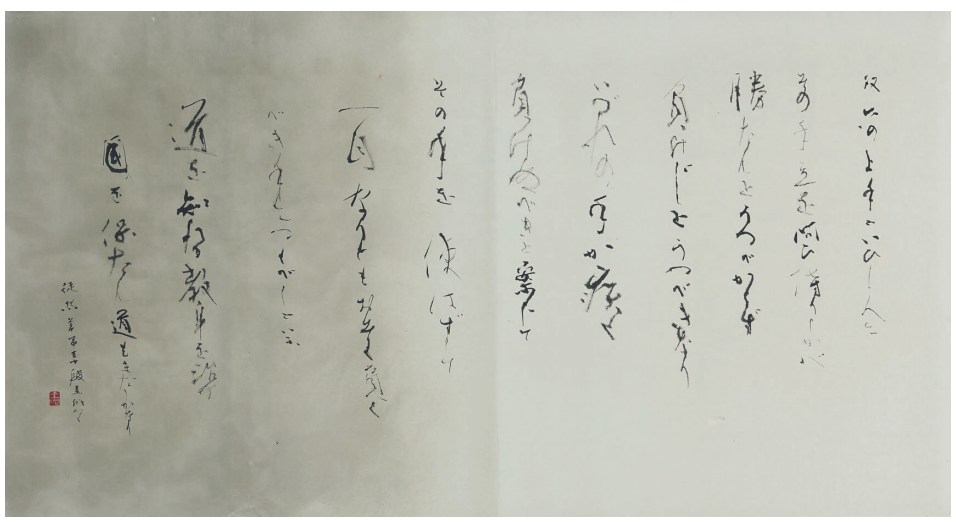
最高顧問　井茂　圭洞

上：無常（良寛）
下：心得（兼好法師『徒然草』第百十段）



紙面の流動性を求めて、気韻生動など書の美的要素を表現することを目指して、自然な用筆を試みました。

可読性を念頭に、要白美を意識しながら変化が大きな作品の制作を意図しました。



最高顧問

黒田　賢一

右：もみぢ（『万葉集』巻八）
左：はつ秋（松尾芭蕉）

紙面から醸し出される雰囲気を感じて頂きたく、白が美しく映えるように、気に満ちた線と流れを意識した。

青田も海も緑一色と詠む芭蕉。秋のもの静かで爽やかなこの風景は自ずと淡い墨となりました。

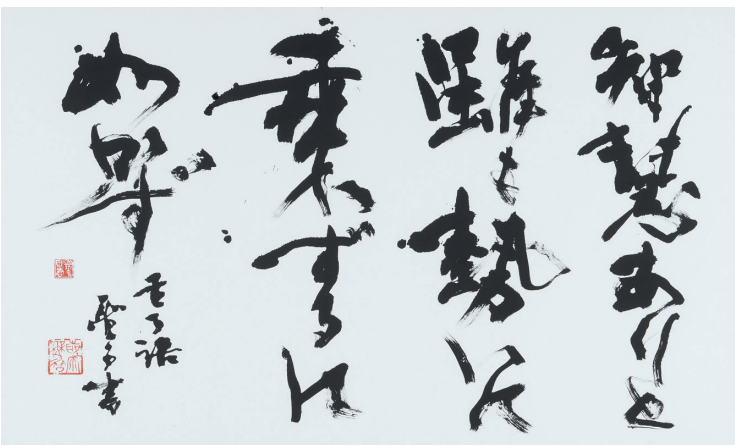
最高顧問

髙木　聖雨

右：憑依（韓愈『雑説』）
左：孟子語（『孟子』）

本作は金文の字形と様々な線を以て余白の妙を求めた。幾何学的な線が生み出す白は、作品に広がりと奥行きを与え展覧会会場で映えてほしい。

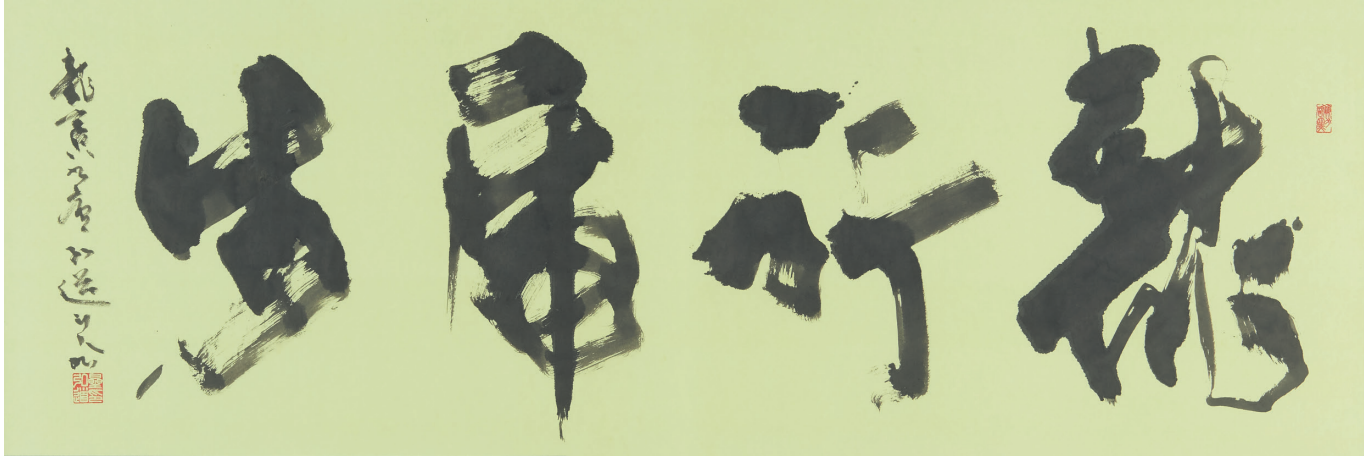
強い漢字を主とした調和体作品の場合、平仮名を調和させるのは至難である。平仮名の字形、大きさを工夫し、特に多様で強い線を意識し漢字との調和を図った。



最高顧問

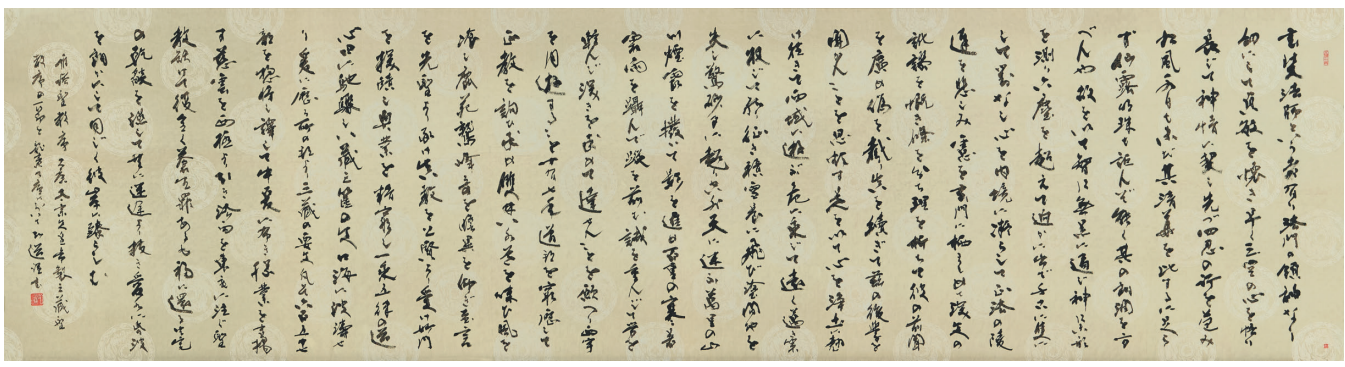
星　弘道

上：龍行虎歩（『宋書』武帝紀上）
下：雁塔聖教序の一節（唐・太宗『大唐三蔵聖教序』）



この意味は、威儀荘重の様をいう。龍には、めぐむ、いつくしむの意を含んでいる。強いだけでなく優しさもある。

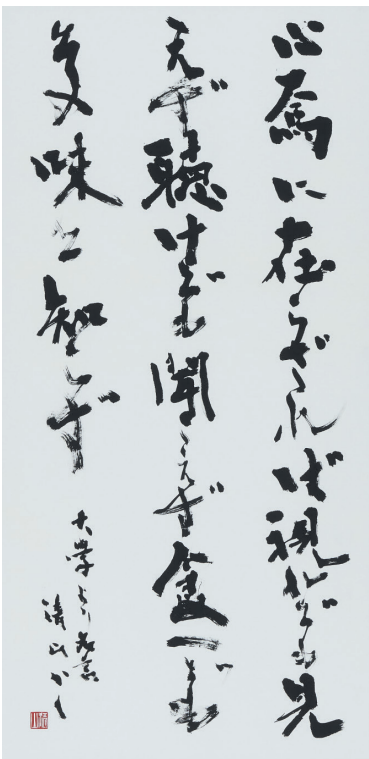
西遊記でも有名な玄奘三蔵法師について雁塔聖教序の中に出てくる部分を書いた。この人がいなかったなら日本佛教はなかった。



顧問　梅原　清山

上：鴻慈（梁・元帝）
下：『大学』より名言（『大学』）

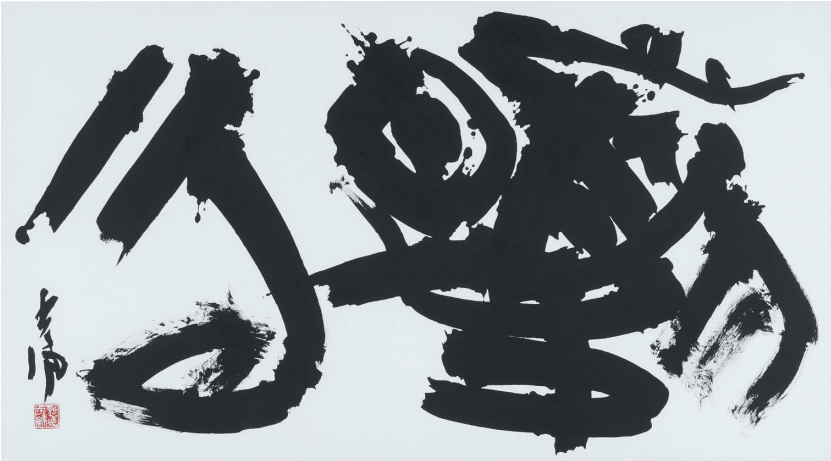
意味は「大いなるめぐみ」。強い表現の大字楷書作品が好みなので北魏調で書作した。



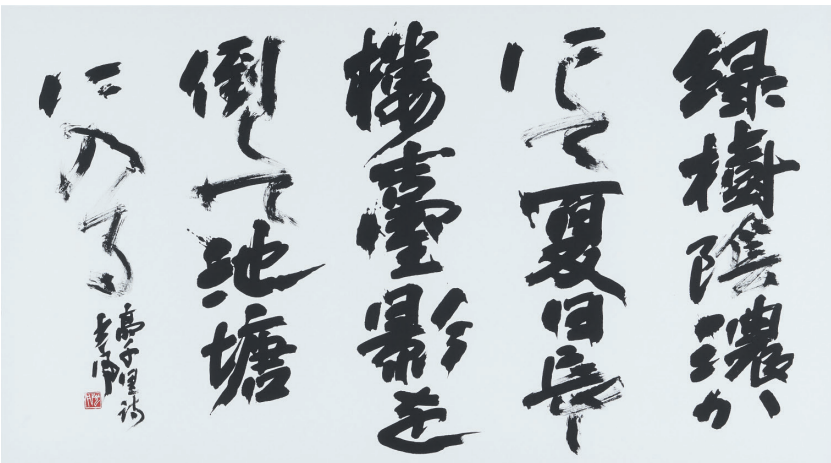
ごく普通の事を言っているが流石に名言。作品の書き出しの字柄（じがら）も悪くないと思い書作した。

顧問　新井　光風

上：夏雲（陶潜『四時詩』）
下：高千里の詩（高駢『山亭夏日』）



書の深奥のまだ見ぬ新たな世界の探索を試みたがこの状態。全てが、今が、まさに第一歩という感あり。

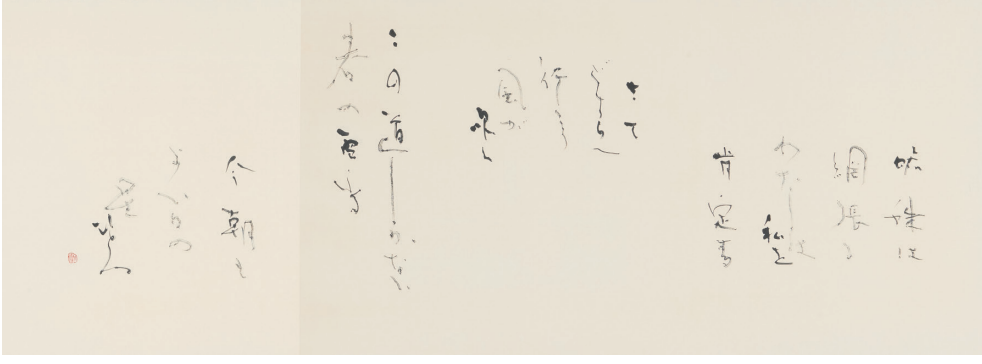


高千里の詩を読んでいて、調和体としての幻影を追いかけた結果がこれである。表現の主眼は空気と響き。

顧問　池田　桂鳳

上：筆（良寛）
下：道（種田山頭火）

右は打楽器の、左は管弦楽器の演奏をイメージして書いてみました。



間もなく米寿。これからの人生をいかに送るか、山頭火の句集から集めてみました。

顧問　杭迫　柏樹

上：米寿　高年秋天に似たり（自詠）
下：天に星　地に花　人に愛（自詠）

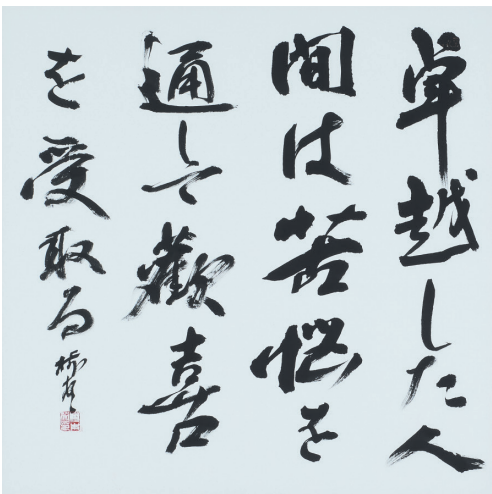
米寿を迎えた。サワサワとした心境で書にも人生にも。「今は心よ我に従へ」と良寛さんも歌っているではないか。

天・地・人―学問では天文学・地（文）学・人文学とあるが、それぞれにあるべき美しい世界を求めて。

顧問　樽本　樹邨

上：雙鳧觀（蘇軾）
下：ベートーヴェンの言葉（ベートーヴェン）

今回の三文字「雙鳧觀（さうふくわん）」は蘇軾の詩の題名から選んだ。着想は大きくゆったりと墨量を豊かに一本の線でもぐらつかないように心した。

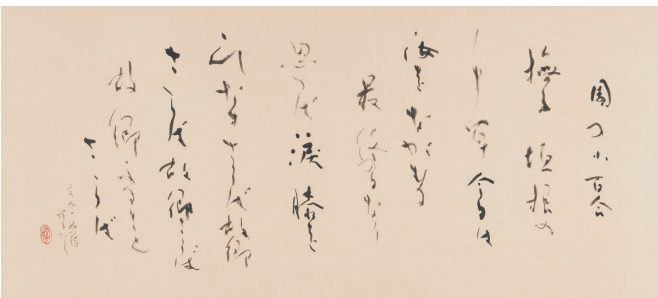


全体に穏やかに素直に書いてみた。

常任総務　土橋　靖子

右：秋雨（長塚節）
左：故郷を離るる歌（吉丸一昌）

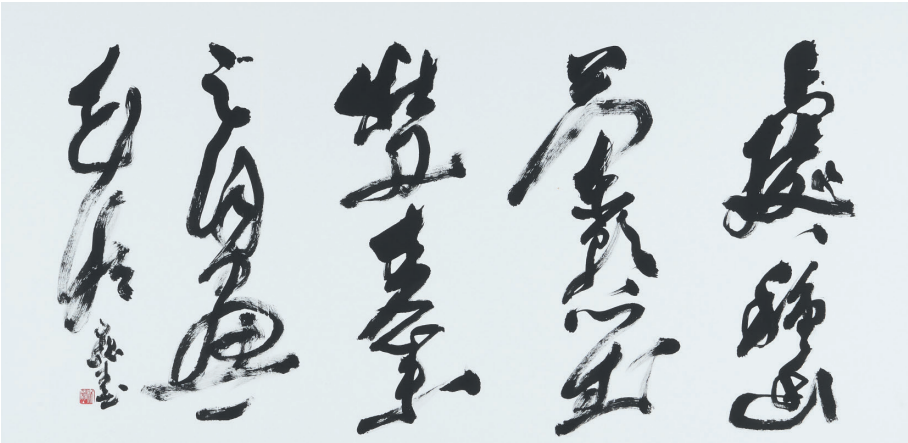
あまり形を追わず伸びやかに、懐大きく書きたいと念じました。書には呼吸が大切と、改めて痛感しました。



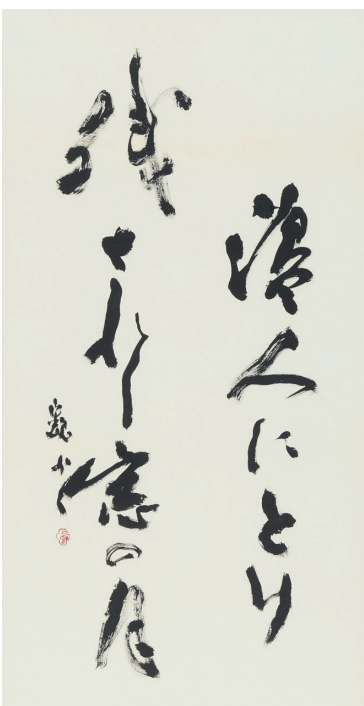
ドイツ民謡を原曲とした日本語歌詞です。原風景を想いながら、ゆっくり口ずさみつつ書きました。

常任総務　真神　巍堂

上：蘭（袁枚）
下：窓の月（良寛）



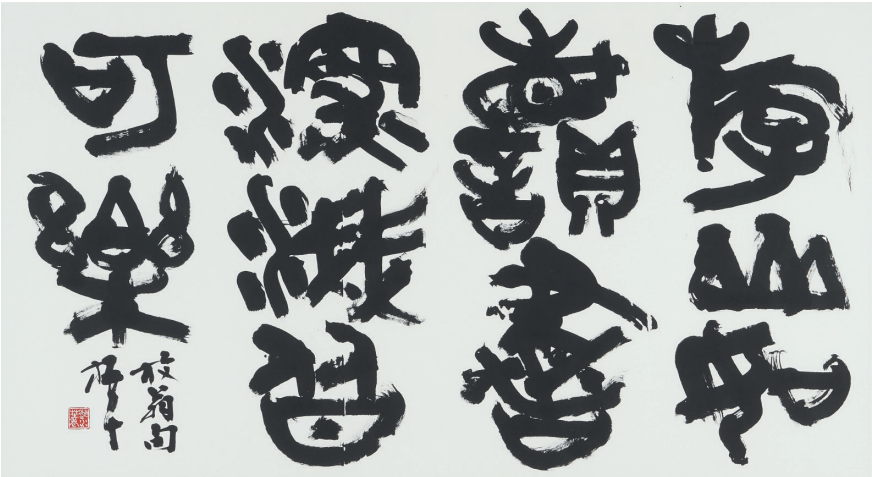
造形の縛りから解放され気の赴くままに運筆しました。



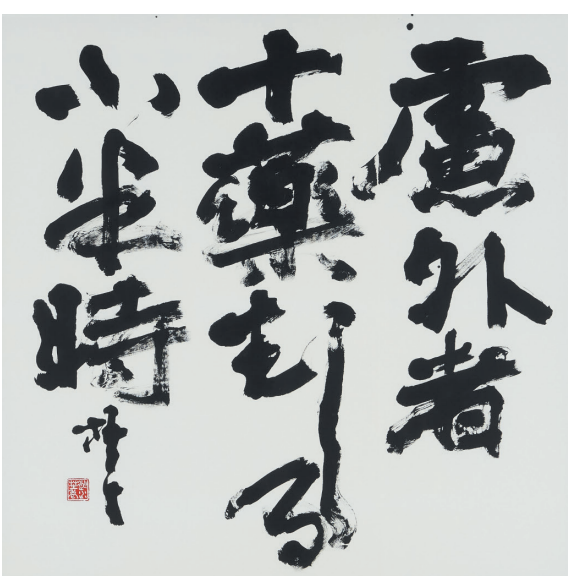
わずかな散らしを使って〝残〟の造形の妙を表現してみました。

常任総務　牛窪　梧十

上：陸游句（陸游）
下：慮外者（自詠）



深浅みな楽しむべし。そんな境地に共感する年齢になってしまった。



広くもない庭に十薬がはびこる季節となった。慮外者とは十薬のことか、己れのことか。